

【中山間地域研究センター資料】

県中山間地域再生重点プロジェクト概要(邑南町の取組例:阿須那地区)

① 実施団体 「YUTA か」プロジェクト(ゆたかプロジェクト)

地域マネージャー(平成22年度末時点):井上貴美子氏(40歳代、女性、地区在住者、地域の推薦で採用、月12日・96時間で業務に従事)

② 地域の概要(資源の分布、人口動向)

*住民基本台帳(平成23年1月末現在)

人口	893人	世帯数	396世帯	集落数	4自治会	高齢化率	50.6%
行政機関等	阿須那公民館			学校	阿須那小学校		
医療機関	阿須那診療所			その他	給油所、Aコープ		
観光資源	次の日(じのひ)祭り(賀茂神社)						
主要産業	農林業(農事組合法人)、食品製造業(酒造業、農産加工グループ)						

③ 推進体制(事業推進前の地域づくりの状況、拠点の有無、事業の推進体制)

○ 事業推進前の状況

- 各自治会で地域活性化への取り組みがあったが、継続性が課題。

○ 活動拠点

- 阿須那公民館

○ 推進体制

- 会員約30名(各自治会会長推薦25名、自主参加、役員等の声かけで参加が数名)
- 県からの駐在職員による日常的なサポートがあったことが特徴(～H21)
- 「YUTA か」プロジェクト内に4部会を設置

④ 3カ年の作業の流れと達成度

○ 地域への事業説明と運営体制の準備

- 町が自治会等と協議を行い、各自治会からの推薦でプロジェクト会員および役員を選出。
- 会員の協議により組織名を「YUTA か」プロジェクトに決定。
- 地域からの推薦により地区内より地域マネージャーを採用。
- 平成20年8月に実施したワークショップ(地区の課題及びアイデア出し)を経て、同じ活動意向をもつ方がまとまり部会を形成。

○3カ年の取り組みと主な到達点

分野	取り組み	事業開始前	現在(成果)
福祉、文化	短歌集「豊歌」の定期発行	—	一人暮らしの高齢者を会員とし、各家を回り短歌を回収。その折、世間話、相談事等に乗っている。高齢者の生きがいとなり、地域と繋ぐ重要な機会を醸成。
文化、伝承	カルタ製作・活用	—	当該地区の歴史や文化伝承、現在の様子を題材としたカルタ製作に着手。地元絵手紙グループや阿須那小学校とも連携。地域の未来を考える場としても機能。
交流、農地保全・活用	田んぼオーナー制度(平成 21年度) 田んぼ交流田舎体験(平成 22年度)	—	初年度は広島市の団体ほかモニター価格参加し、プログラムについて郷土料理体験や川遊び等の提案を受けると共に、米、酒等の販路についても提案を受ける。平成 22 年度より「田んぼ交流田舎体験」に名称を改め、継続的な交流体験事業を実施。同時に地元産品(米・野菜・山菜など)も販売。
交流、産業	お酒「豊かなかほり」づくり 酒づくり体験プログラム	農事組合法人、酒造業者が個別に活動。原料は地域外から購入	地元の農事組合法人と酒蔵がはじめて連携し地元の米で地元の酒を醸造。酒は人気が高く、大部分を地元住民が購入するなど地域内資金循環づくりにも貢献。
産業	各種餅の製造・販売	地区のグループが取り組むが活動が若干停滞気味に	町内の道の駅や他町でのイベントで餅つき・実演販売を実施。プロジェクトの有力な活動自己財源候補となりつつある。活動を通し地区住民との様々な関係づくりに寄与している。
産業	ふるさと便販売	地区のグループが取り組むが活動が若干停滞気味に。	地域産品(餅やゆず、各種加工品、正月飾等)を詰め合わせたセットを交流体験者などに向け販売(年末)。交流体験で培われた関係性をより太くすること、地元産品の販路拡大を促進。

⑤ 新しくできた繋がりと今後期待されること

○ 地区内のつながり

- ・事業前、独自に活動していた様々な人材、グループ、企業等が、短歌の会活動、酒づくり、餅づくり等、「YUTA か」プロジェクト各部会の活動を礎に連携関係を醸成。

○地域外(都市部)のつながり

- ・「田んぼ交流田舎体験」、「酒蔵体験」等を通じ、広島圏域の団体・住民と新たな関係性・交流が生まれる。地元産品の販路構築に寄与するのみならず定住・交流の窓口として機能する可能性も期待。「餅つき・実演販売」では、合併後途絶えていた旧姉妹都市との交流が再開。

○今度期待されること

- ・現在展開されている経済的な要素を含むいくつもの積極的な活動を充実・強化し、自己活動資金を獲得していくことが期待されます。
- ・活動を進める上で、事務局・中心的な活動メンバーや地域マネージャーに負担が集中する傾向が見受けられ、今後更に活動の実働メンバーを維持・確保していくことが期待されます。また、個々の活動の深化に応じて生じる法規制・税制などへの対応を専門的にサポートする体制を強化する必要もあるといえます。
- ・福祉性・緊急性が高いと考えられる農作業支援や高齢者の生活サポート、耕作放棄地対策等、すなわち「守り」の活動について重点的に取り組まなければならないという声が多く見受けられました。今後は、これらの活動に力を注ぐことも求められます。

「耕作放棄地ゼロ！ 地域でふれあう三久須型集落放牧」 三久須放牧組合の取り組みについて

1. 三久須・集落放牧のはじまりと経過

大田市水上町三久須地区では、集落内の耕作放棄地が拡大することに危機感を感じ、農地保全を目的として、牛を周辺農家から借り受けて平成12年から放牧を始めました。その当時の三久須集落は、昔は牛を飼育していたとか子供の頃は牛と接したことがある人たちが目をつけたのには、大田市で放牧が盛んになったことが背景にありまじった。また、耕作放棄地が集落内で増加していくことを深刻な問題として地域が考え始めたこともきっかけになりました。

平成12年当時の大田地方では、畜産農家による放牧は広がりつつありましたが、集落での取り組みは、「小山地区放牧の会」や富山地区の共同放牧ぐらいたしかなかった。三久須地区では、まず、集落内の3名が、試験的に牛を放牧してその効果を確かめてみたいという気持ちで、近隣から牛を借りる準備をしました。放牧を始めて草に覆われた耕作放棄地が改善された状況を見て、放牧に疑心暗鬼だった集落の人々も認識が変わってきました。最初は牛の脱柵や事故もあり、継続が不安になったこともありますが、5年目になると、集落全体が放牧への期待を込めるようになり、多くの人々が毎年春先に牛が来るのを楽しみにするようになりまじった。

ところが、面積が増えるに従って牛の確保がつかなくなってしまう。これは三久須集落だけの問題でなく、耕作放棄地など放牧可能地が増加しているのに対し、畜産農家の放牧経験牛の絶対数が不足しているためです。そこで三久須集落では、農業普及部大田支所に相談して、今後自前の牛を保有する条件に農業、大田支所から牛の貸出しを受けるとにしました。農大の牛の借り受けも期限があり、集落の所有牛だけではやはり不足します。そこで、平成22年度に中山間研究センターがレンタル牛制度を実施していることを知り、借りることになりました。

放牧を始めた当初は1.8haであった放牧面積は1.2haまで拡大しました。集落所有牛は3頭、中山間センターレンタル牛以外に近隣の畜産農家の牛もあわせ、今年度は10頭の牛が放牧されています。

2. 三久須放牧組合の組織について

同放牧組合は現在、22人の組合員で構成されており、1人1万円の出資で組合の維持がなされています。組合員の構成は三久須地区以外の人も含まれています。この他地区の組合員は、現在牛を飼育している人、あるいは近年まで牛を飼育していたという人達で、技術的な面からの協力体制を作っています。

3. 三久須放牧組合がめざすところ

もともと放牧を始めた目的は、三久須集落内の耕作放棄地の解消でした。畜産経営を目指しているわけではありません。高齢化が進み、農地の維持管理が難しくなる中、労力がかからない放牧は効果的です。それ以外に復元した農地を有効利用していきたい考えがあり、サツマイモやソバの作付けも実施しています。農地の維持管理に見合う程度の収益があればよいと考えています。所有牛から収益を得るため、種付けをして子牛を生産もしており、子牛の育成を組合員の畜産農家に委託して出荷もしています。

今回中山間地域センターと近畿中国四国農業研究センターからの提案で、春～夏にかけて放牧し、穀類を与えず草だけで飼育した牛を「放牧牛：熟ビーフ」として販売する試験に取り組みました。この取り組みが集落全体の励みになればと期待しています。

表1 三久須放牧組合の状況と放牧面積の推移

	開始当初(12年度)	18年度	現況(23年度)
放牧面積(ha)	1.8	9.5	12
放牧頭数(頭)	2	10	10
うち集落所有頭数(頭)	0	2	3
組合員(人)	3	22	24



集落に広がる耕作放棄地



耕作放棄地へ放牧中



背丈以上の草の中も放牧可能



人にも慣れている